

●国際電気通信連合 (ITU) にて2030年におけるネットワークの姿が議論されるなど (ITU-T にFG-NET-2030を設立)、オープンソース・汎用ハードの活用等、ネットワーク構造の変革についての議論がグローバルに活発化している。また、経済・社会活動全般のネットワークへの依存度が高まっている状況を踏まえ、2030年頃におけるネットワークの将来像を描く事が必要ではないか。

●描いた将来像を基に、2030年頃の「クラウドネイティブ化」、「フル仮想化」、「E2Eでのスライス化」等を見据えて、ネットワーク構造(設備、機能)の変遷(フェーズ分け)を考えていく必要があるのではないか。

<フェーズ分けの視点(例)>

- ・ネットワークのどの「機能」を仮想化するか？(コア、RAN、伝送 etc)
- ・スライシングの対象は？(E2Eか一部か、単一事業者か複数事業者か etc)
- ・クラウドをどのように活用するか？(プライベートクラウド、パブリッククラウド etc)
- ・オープンソフトをどれだけ活用するか？

●それぞれのフェーズにおいて、電気通信設備の安全・信頼性の観点から想定されるリスクやネットワークが具備すべき機能(例:緊急通報、災害時優先通信等)の実現方策を洗い出すことが必要ではないか。

●洗い出したリスクに対して「どのような対応策が必要か？」等の検討が必要ではないか。

ただし、現時点において、すべてのリスクに対して厳密な対応策を措置するのではなく、イノベーションの促進やビジネスの発展も考慮した対応が重要ではないか。